西南学院大学
図書館報

第18号
昭和36年12月5日発行
発行所 福岡市西新町798 電㉜0031
西南学院大学図書館
発行人 山下和夫

コロンビア大学図書館寸描

―― アメリカ便り ――

山中均之

26 37

日本をでてからはや10ヵ月。ニューヨークはあつい夏がすぎて、ここしばらく秋晴れのよい日が続いています。

さて、コロンビア大学の図書館について何か報告しろということですので、それについて若干書きます。コロンビア大学の図書館は全部で12あります。しかし私などが利用するのはビジネス・ライブラリーであって、ここには経営学、経済学、マーケティングなどに関する書物が15万冊、アメリカ及び外国の定期刊行物が2千以上ある。またフィナンシャル・コレクションには1821年から現在にいたる約50万の会社の財務の歴史に関する資料や文献がおさめられている。更に約300万冊の蔵書を有する他のコロンビア大学の図書館を利用することもできます。

筆者が痛感したことは、大学の講義と図書館の利用とが密接にむすびついているということです。通常講義でつかわれるテキストや参考文献は一般の他の図書とは別におさめられており、書物だけでなく雑誌論文のようなものに至るまで、全部著者のA、B、C、の順に配列されてあって自由に見ることができる。しかも同じものが何冊か用意されているので、学生は講義の準備に図書館にきて、それらの参考文献を読むことができる。しかし講義の1、2時間前にきてさがしても、間々ないことがあるが。

教授は多くのアサインメントをわりあて、講義はそれらの参考文献を読んだことを前提として行われます。しかもたいてい、教授が一方的にしやべるというような講義ではない。たえず教授と学生との間で討論がなされるから、もし予習していなければ討論に参加することができないことになり、講義にでても意味がない。

教授のあげた参考文献を全部自分で買うことはできないから、図書館の利用ということが講義にでるための必須の条件になるわけです。ある学生が、広い図書館で勉強するのは何だか落ちつかない、ことにガールがいると気がちって仕方がないといっていた。そんな学生もいることはいるが、たいてい熱心な図書館の利用者です。

更に一般の図書はもちろんいつでも自由に読めるし、また借り出すこともできる。ただし自分でさがさなければならないので、なれるまでは広い書庫をあちこち何べんかうろうろしなければならないが。

またグラデュエイト・スクールの学生は図書館内に設けられた特別の部屋のデスクを自分のものとして借りきることもできます。自分の必要とする書物をもってきて、デスクにならべ長期にわたって読むことができるようになっている。従って個室ではないが、共同の研究室があるみたいなものです。

図書館を通して必要なものは、マイクロ・フィルム、写真などにとることができ、注文してから2週間もすればきれいに出来あがっているというわけです。このように書いてくると、日本の大学の教授や学生は、アメリカの大学の水準で考えるならば、研究や学習の不可能な条件の下に研究し、かつ学習にはげんでいるということになりそうです。

(筆者は本学助教授　留学中)

告知板

○ 毎月第一水曜日の午後は定期休館します。これは、書庫の整理や職員の事務打ち合わせのために行なうもので、利用者の皆さんには大変ご迷惑をかけますが、オープン・システムであるため書庫の整理が、休館しないと実施できない関係で、ご諒承をお願いします。

○ 夏期休暇中に閉架書庫に鋼製の書架が据えつけられました。これで、行き詰まりつつあった図書の收容能力にどうにか余裕が生じてほっとした次第です。工事中は、長期間の休館のため皆さんに大変ご迷惑をおかけしたことと思います。

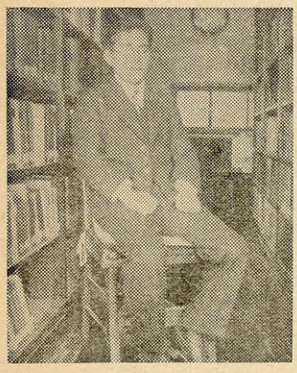
○ 目録カードを1階から2階に移動するとともに、2階の新聞は1階におろすことにしました。皆さんのご利用には便利になると思います。

○ 11月7日は故波多野培根先生の記念日です。先生の遺された2千余冊の記念文庫の上に今なお、そのご遺徳が偲ばれてなりません。当日はその文庫の目録を配布しました。

学院図書館発足当時を回想して

丸　岡　正　介

筆者は昭和4年本学院高等学部文科第5回卒業、大正15年9月在学中より図書室勤務、昭和13年9月まで在職され、発足直後の学院図書館の充実整備に当られた。現在、東洋火災海上保険株式会社高松営業所長。



写真説明　昭和7年頃の書架（人物は筆者）

大正15年より ―― 昭和13年まで

先日、木村図書館長殿から学院図書館の発足当時より私の在職中の図書館の状況等を書いて送る様にとの御依頼に接しましたので、大変なつかしい思いで当時のことを回想してみましたが、急にははっきりしたことが浮んで来ません。そこで、毎日少しづつ断片的に泡沫の様に思い出した事をまとめてみることにしました。何分37年も昔のことですから、多少どころか相当の誤差があると思いますが、不悪御諒承下さい。

私が学院に入学したのが大正14年で、図書館の仕事をさせて頂く様になったのが大正15年、私が文科2年の時でした。ですから、大正13年図書館発足直後の頃の事は充分わかりません。お話しによりますと、大正13年12月に高等学部本館に教室1室と図書館附属書庫1室の2階建が増築されたとのことですが、それは多分高等学部本館の東端1階が図書室（書庫）で2階が商科の教室となっていましたから、この建物の事だろうと思います。

この図書室は（当時図書室と称していました。）書庫兼用で、二方が窓のため大変明るく感じのよい部屋でした。私はその中で事務をとっていました。

閲覧室は直ぐ隣りの商科の特別教室（商品学、簿記学等に使用）でした。これは又うす暗い部屋でした。併し、図書は殆んど貸出制をとっていましたので閲覧室はどちらかといえば不用でした。

図書館はこの建物が完成と同時に発足したものと思います。仄聞していたのですが、小野兵衛教授が大正13年頃図書館に関する研究をされ、学院の図書も十進法によって分類され索引も謄写刷で洋半紙に印刷し5冊ばかりおいてありました。かくして図書館としての体制を一応ととのえられた由です。これらの仕事は第4回卒業の岡良造氏なども手伝われたそうですが、小野教授としては相当のお骨折りだったことと想像します。

私が卒業と同時に図書係りとして正式に奉職しましたので、種々改善を致しました。第一に書庫の移転と閲覧室の完備でした。従来の図書室（書庫）が明るいので、この部屋を閲覧室にして、書庫を隣りに移しました。閲覧室に大テーブル3台を備付け、索引もカードに改めました。昭和7年の頃と思いますが、高等学部教室が不足したので、図書室を中学部校舎の西端の1階の教室に移しました。

ここでは、中学部の図書も収容しました。又神学部の図書も一部収容しました。それは神学部で不用の分だけと思います。私としては、別に関係していませんでした。中学部の教室は、高等学部のそれに比して広くはありましたが、それでも壁側は天井まで書棚を作り収容しました。勿論閲覧室などもありませんでした。この状態では第一に図書館としての機能を発揮出来ませんし、第二に火災の危険性があり、若し火災があれば約2万冊の書物が灰燼に帰するという実に危険千万な状態だったのです。このような状況に対して図書館の独立ということが急務となったため20周年記念事業として赤煉瓦書庫の建築が計画されたことと思います。併しその様な計画は私の計り知る処ではありませんでした。

けれども、私が学院を退職する頃に、中学部の西端の道の側に2階建のコンクリートの建物が出来かけていました。これが20周年記念事業の書庫だろうと思います。ところで小野教授が図書館創設に努力されたので図書館長になられたと思いますが、その時期については、お話しのような昭和8年ではないと思います。私は初耳です。当時私は、文部省主催の講習会（九州帝国大学にて開催）に10日間出席して事務的な事は一通り習得しましたので、図書館の事務的な事については私の独断でやっていました。又経費の点は藤井政盛氏（学院の彦左エ門）と相談していました。同氏の許可なくしては何も出来なかったのです。

写真の御要求がありましたが、高松の空襲の際大分焼きましたので、少し残っている中から4枚別紙に貼附してお送りします。御参考にならないかも知れません。

図書館もまだまだ研究の余地があるように感じられます。折角のご発展をお祈り申し上げます。

写真説明　昭和6年4月頃、図書室と閲覧室と交替したときの閲覧室の一部

西南学院大学図書館略年歴

大正10年4月	西南学院高等学部（文科・商科）開校
11年4月	同　校舎竣工
12年4月	西南学院図書館創設、仮図書室設置、小野兵衛教授図書係教授就任
13年12月	高等学部本館に図書館附属書庫を増築、図書原簿登録開始、西南学院図書館蔵書目録（図書分類法）による分類開始
15年1月	浅香忠良氏図書係就任
15年9月	丸岡正介氏図書係就任
昭和7年4月	図書室を中学部校舎に移転
8年4月	小野兵衛教授図書館長（初代）就任
13年4月	西南学院図書館規定（閲覧規則）施行
14年4月	坂本重武教授図書館長就任
17年3月	図書館附属書庫（赤煉瓦）竣工（20周年記念事業）
17年10月	〃　閲覧室竣工（20周年記念事業）
23年9月	八田薫教授図書館長就任、木村秀明氏最初の司書に就任
24年4月	西南学院大学開学 西南学院図書館規則（旧規定の改正）施行、図書館委員会発足
24年7月	日本十進分類法第6版採用による分類切換開始、著者名・分類のカード目録切換開始
24年9月	中沢慶之助教授図書館長就任
25年1月	増加図書目録創刊
25年7月	九州大学第1回司書講習に本館より職員6名参加
昭和27年1月	中村弘教授図書館長就任、神学科図書室独立
27年3月	大学新校舎竣工、新館2階にリザーブ・ブック・ルーム設置
29年1月	新図書館、学術研究所起工
29年10月	同上竣工（図書館延390坪、研究所延200坪計延590坪）、旧館より移転、開架制度採用、諸手続・制度切換
30年5月	図書館報創刊
31年1月	里見安吉教授図書館長就任
31年4月	西南学院図書館閲覧規則（開架制度による改正）施行
33年1月	船越栄一教授図書館長就任
34年4月	西南学院図書館規程（組織規定）施行
34年11月	波多野文庫目録、柳原・村田・小田文庫目録作成
35年1月	木村毅教授図書館長就任
35年3月	図書館の一部改造
35年4月	学院図書館を大学図書館に改組、大学図書館規程、学生利用規則、教職員利用規則、特別利用者規則制定施行
35年7月	司書・司書補・司書教諭講習実施

特集

趣味と教養の鍵

～～～ 読書シーズンをゆたかに ～～～

文芸、小説

図書館へ行って、新刊の小説などを読もうと思っても、なかなかないものだ。あってもすでに借り出されている場合が多い。たまに手に入れば、手垢で薄汚れていて、新刊らしい新鮮さは全然ない。学校図書館の場合は新しい小説は特に少ない。それはその性質上やむを得ない面もあるが何となく、もの淋しいものだ。われわれの図書館も御多分にもれない。しかし、「現代日本文学全集」みたいなものがあって、ある程度のものは読める。3階に行って、「現代日本文学全集」の並んでいる前に立つと、いったいどんな作家が、学生諸君の間で興味があるかがわかって大変面白い。まず、装釘をしなおしたものは、「文雄、聖一」「大仏、石坂」「竜雄、友一郎、織田作、靖」「士郎、達三、葦平」「潤一郎」など、「荒風」は改装一歩手前である。その他汚れ具合で、人気の程度を卜することができる。

しかし、私は学生時代には古典を読むことをすすめる。古典といっても必ずしも、ギリシャ・ローマだけなく、日本では紅露逍鷗から、全集本の出ている程度の作家はそのなかに含めることにしての意味である。実篤、太宰、鏡花、賢治、牧水、志賀、その他古いところはいろいろあるから読むものには不自由しないはずだ。近頃岩波で百冊の本というものを選択して新聞に広告している。せめてあのなかの、小説、文芸ぐらいは学生時代に読破したらどうだろう。

（筆者は学術研究所長、坂本重武教授）

＊ ＊ ＊

音楽

音楽の好きな人は月刊雑誌のどれかに目を通しているだろうが、本館には「音楽の友」と「レコード芸術」があり、これだけでも教養のための音楽の知識は相当に得られるし、内外の音楽界の現況もわかる。

鑑賞の友としては名曲解説事典（音楽の友社、全10巻）はよく整備された解説書でありN響名曲辞典（平凡社、全6巻、編集委員の一人後藤和彦氏は本学英文科出身）もいい。

何事にも辞典が必要であるが、音楽の友社の音楽辞典は楽語篇と人名篇の2冊からなり、全部で12巻。辞典ではないが創元社の創元音楽講座（全5巻）は社会学的、民族学的な面からも考えられている所もあり興味深い双書である。平凡社の音楽事典は洋書の辞典では Scholes の The Concise Oxford Dictionary of Music (Oxford) が楽語、人名一緒で要領よくまとめられており、立派なものである。よりアカデミックなものでは Apel の Harvard Dictionary of Music があり、人名はないが、標準の音楽辞典で、邦語の辞典の内容もこれからとったものが多い。人名だけは Baker の Biographical Dictionary of Musicians が標準で、邦語では渡辺護の現代演奏家事典（修道社）が大変面白く有益なもの。更に細かな研究のためには Grove の Dictionary of Music が本学に数年前から購入されていて英語で書かれたものでは最高である。（全7巻）

更に歴史の方に興味がある人には最近、可成りの本が飜訳されて出ているが、アインシュタインの音楽史が大宮氏等4氏の訳で出ている。ライヒテントリットの音楽の歴史と思想は服部幸三氏の訳であるが、共に標準的な大学の教科書ともなるべきもので、一読をおすすめする。なお、原書は神学科の図書館にあり、ここ数年可成りの数の歴史書（原書）が購入されている。

Darrell の Schirmer's Guide to Books on Music and Musicians は音楽に関する本が大体全部分類されてのっており、音楽の各分野について研究したいものには、これによって有益な本の存在を知る事が出来よう。

本学にはまだ音楽の正式な講座もなく、従って図書もないが、将来には、この分野も開設充実していただきたいものである。（筆者は古沢嘉生講師）

＊ ＊ ＊

映画、演劇

1、演劇

先づ事典として「演劇百科大事典」全6巻、早稲田大学演劇博物館（編）平凡社刊（現在継続受入中）があり、編者の30周年記念として刊行されたものの様です。内容は狭い意味の演劇だけでなく、音楽・舞踊・オペラ・歌謡・演芸・民俗芸能・映画・ラジオ・テレビ等項目にわたり、付録として演劇年表、芸能系譜、民俗芸能歴、参考文献一覧をのせてあります。一冊物では、「芸能辞典」演劇博物館（編）東京堂刊。「演劇・映画・放送・舞踊・オペラ辞典」飯島正（等編）白水社刊があり、其の他全集物として「現代演劇講座」全7冊、三笠書房刊、等があります。

2、映画

日本に映画がはいって来たの明治29年だということですから、もう60数年にわたり私共の身近かに1つの娯楽として育って来て、現在は生活の一分野として必要なものとなってきている様に思われます。

その意味で、常識として又は鑑賞の手引として岩波新書中より2、3あげてみますと、「映画のみかた」瓜生忠夫（著）、「日本の映画」瓜生忠夫（著）、「映画の理論」、岩崎昶（著）があります。（筆者は杉本善夫司書）

＊ ＊ ＊

地誌・紀行

けさの新聞広告をみると、小田実氏の「何でも見てやろう」という本がついに百版を出したという。最近のベストセラーズの中でのベストであろう。わたしはベストセラーの書物はなるべく読まないことにしているのだが、これは日頃から興味を持っている世界旅行記というので、とにかく一読した。そしてこの本がベストセラーになった理由を考えてみた。一つには世界旅行というものが、最近ではわれわれ日本人の間にも、何だか実現不可能でないように感じられてきたということ、その上にすべての青年がもつ未知の世界へのあこがれが、この知的でしかも野性的な青年の大胆な行動の中にのびのびと実現されていること。そして何よりも大切なことは、「何でも見てやろう」という意欲的な、積極的な態度の根底に、これを支える強い主体的意識が確立されていることである。「われわれはここにいる。よかれあしかれ、ここから以外に出発するところはない」ことを見定め、その現実に立って世界に対面しているこの青年の気迫に動かされるのである。

わたしの少年時代、図書館で「世界文化地理大系」の各巻の美しい写真に見入りながら、ロマンテイックな空想にふけっていた。あのような世界対面と全く異った、新鮮で力強い動きがここに現れている。図書館の地誌も、紀行も、その他「何でも」、この新しい主体的探求の前に生かされ、消化されていく時代が来ているのだと考えさせたのであった。

(筆者は村上寅次教授)

＊　＊　＊

風俗・民俗

長い歴史を生き続けてきた日本人の生活の中には、我々の祖先が時代や環境に応じて感得した固有の風俗、習慣が受けつがれ、これが生活文化の基調をなしている。ここでは、こうした文化遺産を記録された書物の中にさぐり、この図書館の図書より紹介したい。

先ず昨年、雄山閣より発行されたものに「講座日本風俗史」全十二巻とその別巻としての「旅風俗」三巻、および「商業風俗」「妖異風俗」などがあり、詳細に各時代の特質を多方面より究明してある。又、より専門的なものには、同じく昨年、平凡社から出されている「日本風俗学大系」全十三巻がある。一般的に風俗、民俗に関する図書には見て楽しめる図版入りの図書が多い。夕刊フクニチから出版された「日本生活変遷史」、宮本常一著「都市の祭と民俗」や朝日新聞社から出された「図録日本の民俗芸能」又、林唯一著「郷土の風俗」などがあり、いずれも昨年および今年出版されたものである。

又、平易な読みものには藤沢衛彦著「にほん民族伝説全集」全九巻、河出書房刊、があり、各地方の伝説を豊富に収録されており、我々の祖先の素朴な信仰なり、あるいはロマンがつづられている。

その他、辞書類では「総合日本民族語彙」平凡社。藤崎弘編著「冠婚葬祭事典」、大後美保著「新説ことわざ辞典」三田村鳶魚著「江戸生活事典」、西角井正慶編「年中行事辞典」などがあり、このうち冠婚葬祭事典などは日常生活に便利である。

(筆者は伊藤治生司書)

スポーツ

体育の図書として専門的な教育、生理、衛生及びスポーツ技術等の図書と一般的な教養として又趣味としての図書があります。ここでは一般学生を対象とした一般的図書を紹介することにします。

始めに諸君達がスポーツを正しく理解し、スポーツの技術的能力を身につけ、それぞれの個性に応じたスポーツを実践し、学生生活を楽しく豊かにおくるための手引として各種の一般的なスポーツの入門とか、読本といった、ハンドブックがあります。内容は歴史、ルール、技術、記録等が書かれてあり、正課及び課外体育としても参考になると思います。

次に今日登山ブームといわれる程登山は益々盛になってきましたが、登山の図書も多数出ています。山に関するものも専門的なものと一般的なものがあって、私達が一生見ることも、登ることも出来ない世界の山々の解説書や、登山の先駆者たちの苦斗の歴史や、世界の山々を探求し征服した人々の報告誌、科学者によって究明された自然科学、人文地学、又医学的な山の気候による生体の変化とか、障害の諸因子とか、人体に関することなどもかかれて、山に関する知識をあたえてくれる内容のものなどがあります。又この種の図書には山に関係の深い神話とか、伝説、宗教など書かれているものもあり、山の図書は広い教養をあたえてくれます。

又諸君が学生生活の余暇を利用して近郊の山に登る時には、一般的な登山の心得に関する基礎技術及び医学的な知識の書と、山の計画としての参考に、「九州の山と高原」とか、「九重山」といった、ガイドブックを読まれると安全で一層楽しいリクリエーションになることでしょう。

(筆者は山崎剛助教授)

＊　＊　＊

家事

私達の生活に不可欠の衣食住の問題は、これを合理的に工夫していくことにより、その人の生活をより楽しく豊かなものにします。ここでは図書館にある衣食住に関する図書の中より簡単な紹介をしてみますと、

先ず衣服に関しては、服飾事典（田中千代編）があり、之は服装の時代考証の役にも立つと思います。近年は新しい合成繊維が続々と作られるので何からどうして作られどんな性質を有しているかを知るために合成繊維ハンドブックを備えました。食品に関しては食品衛生ハンドブック、栄養に関しては少し古い本ですが基礎的な本があります。

料理の本には講談社編のホーム・クッキングを購入しました。この中は、中国料理、西洋料理、日本料理、来客料理、おそうざい12ヵ月、前菜とカクテル、お菓子篇の7巻で原色写真入りのきれいな本で調理法もわかり易く、当代一流の人により執筆されていますので、楽しみながら作る事が出来ます。又趣味の料理として婦人画報社発行の辻嘉一著、懐石料理、庖丁の二冊は美麗な印刷です。元宮中の司厨長であった秋山徳蔵氏の味のある〝味〟〝舌〟という随筆もあります。育児看護の参考に主婦之友社発行の家庭医学全書があります。急病、外傷、看護法等の一般知識を読みとって頂きたい。

(筆者は坂口のぶ司書補)

英文学閲覧室にShakespeareとJohnsonの額

……永嶋大典先生ご寄贈……

昨年10月に本学から神戸大学へ移られた英文学の永島大典先生が、その折、学院にお世話になったお礼の一端にと、図書館に金一封のご寄附をされましたが、それでシェークスピアとジョンソンの肖像写真額が購入され、英文閲覧室に掲げられました。シェークスピアとジョーンソンが選ばれたのは、先生のご専攻であるのと、加えてご本人のご希望もあったからです。何れも本館の蔵書中の写真を美術写真家の手により複製したもので、その出所は、

Halliday の Shakespeare, a pictorial biography. (938. SHA. 0. 75) と Boswell's life of Johnson, vol. 1 (938. JOH. 0. 8-1) です。比較して見ると、全くその出来ばえの見事さに驚かされます。英文閲覧室は、お蔭で見違えるようになりました。同先生の温いご好意に感謝されてなりません。

大学図書館見学記 (2)

立教大学図書館新館

近年、第二の新宿としてめざましい発展を遂げた池袋で国電を降り、西方約 500米、こんもりおい茂った一角に、赤れんがの建物の並んでいるのが、聖公会系のというよりは、六大学リーグの名門といった方が、一般にはわかりがよいかも知れぬ立教大学である。正門を入って左手、旧図書館に接続して東側に建てられているのが新館である。本学河野博範教授の幼な友達武藤重勝副館長の御案内で見学させて貰う。

わが国建築学の泰斗岸田日出刀博士を顧問とし、東大丹下健三研究室設計、清水建設施工、内部設備を含めて総工費約1億3千万円をもって昨年6月末完成、南北約28米、東西約22米、正方形に近い矩形をなした部分が、地上4階、1・2階は收容能力約13万冊の積層式鋼製閉架書庫、3・4階は閲覧室、外観の上部はコンクリート打放し仕上、下部は渋い赤れんがで包んであり、他の建物とよくマッチしている。南側に続いて張り出し部分があり、1階は事務室、2階に館長室、教授閲覧室、応接室など、屋上は学生閲覧室への〝花道〟になっている。

学生はまず、手前の幅広いコンクリートの階段を昇り、左折して、学生の憩いの場にもなっている屋上花道を通るあいだに、読書〝ムード〟を整えるようにできている。3階やや左寄りの入口で学生証を見せ、入館票を貰って入ると、左手にカード・ボックス、新聞台、その北側に新着書展示ケースを仕切りとして参考閲覧室に続き、その右に木製書架が並び、蔵書15万冊の内約2万冊がオープンになっている。その右側、窓に沿って自由閲覧室、さらに南側に雑誌閲覧室、その左が4階への階段、これで3階をぐるっと一巡したことになる。

どの閲覧室も壁やドアで仕切ってあるわけではなく、正方形に近い広い空間を各種の書架で区切ってあるだけである。中央には、図書運搬用のリフトと閉架書庫に通ずる細い階段を囲んで、正方形のカウンターがあり、クローズ図書の出納をする館員が数名いる。4階は約 240人収容の大閲覧室で、四方がガラス、明るく実に快適である。設備品は、読書机、椅子、書架、カード・ボックス等々、すべて独自の設計、材質を選び、一流メーカーの製作にかかり、機能的かつ芸術的、見れば見るほどため息が出るくらい。閉架書庫には19のキャレル（書庫内読書机）があり、博士課程学生などの使用に供されている。

張り出し部分の地階には、30席を備えた映写室のほか、録音室、複写室などがあり、全館暖房、電話設備はすみずみまで行きわたり、至れり尽せりの一言に尽きる。ただ一つ疑問に思われるのは、一番大切な3・4階に、各部分を仕切る壁もドアもないことである。この型破りのモダーンな様式のために、行儀のよい紳士的な立教ボーイにもかかわらず、出入りの音、階段の上り降りの音などで、何となく全体がザワついていることである。一考を要するのではないだろうか。

（本学図書館長　木　村　　毅）

連盟奨学生の図書館奉仕

バプテスト連盟の奨学生の方々が、その奨学金の趣旨にそって、図書館に事務の奉仕をされています。昨年度は5名、本年度は11名の方々で毎週1人1時間から3時間位の奉仕です。

寄贈図書紹介

○英和対訳袖珍辞書　慶応3年江戸再版（古賀学長寄贈）

○新板字彙　梅鼎祚撰　重訂版（同　上）

○法律学関係図書700冊 経済、社会関係図書150冊一般図書100冊他雑誌多数（同　上）

○Encyclopaedia of Britannica. 9th ed. vol. 1～24 1878～88 (gift by Prof. E. B. Dozier)

○The new teachers' and pupils' cyclopaedia. vol. 1～6 1915 (gift by Prof. E. B. Dozier)

○福岡市公報、福岡市例規集（福岡市総務課寄贈）（これで福岡県、市とも公報、例規集が揃いました）

編集後記

今回はアメリカ留学中の山中均之先生より原稿を頂くと同時に、学院図書館発足当時図書館に勤務されていた丸岡正介氏より貴重な資料としての当時の実情を氏の原稿より伺うことができた。従って紙面の都合上、6頁として収録させて頂いた。又、発行の遅れたことを深謝する次第である。